

ダンジョンでサービス残業をしていただけなのに

さすら
流離いのS級探索者と噂になってしまいました

3

◆著 KK ◆ill. riritto

蘭

情報収集が
趣味の
探索者オタク。

ヒバナ

日本探索者界の
絶対王者。

ジミ子

ブラック企業所属の
底辺配信者。

カガッチ

若手探索者の
ホープ。

わたり ひなた
渡陽向

探索者ネームは「影狼」。
サービス残業のストレスを
ダンジョンで解消していた
ところ、凄腕探索者として
バズってしまった青年。

主役登場人物

フェンリルの親子

陽向に飼われている
幻のモンスター。

俺の名前は渡陽向^{わたりひなた}。

社会の歯車として身を粉^{こな}にして働く、サービス残業なんて当たり前の立派な社畜^{しゃぐ}……だった。

ある日、企画のアイデア出しと気晴らしを兼ねてダンジョンに潜^{もぐ}った俺は偶然、人気配信者シュガアを危機から救う事になる。

結果、俺の存在は世間で大バズり。

流離^{さすら}いのS級探索者、影狼^{かげろう}として話題になってしまふ。

挙げ句の果てには政府直属の対ダンジョン・魔獣特務機関——通称タイマとも繋^{つな}がりが出て……結果、働いていたブラック企業を退職する事になった。

本格的に探索者、影狼として活動を開始した俺は、早速、同じく探索者にして配信者であるトーカさん、ミケさんとコラボする事に。

続いての冒険に飛び込んだ秋葉原ダンジョンでは、伝説の超希少種フェンリルを密猟団の魔の手から救ったり、タイマの隊長である葉風^{はかせ}さんとも一緒に戦ったり、天国と呼ばれるボーナステージ（地下温泉）に到達したりと、初配信にしてかなり盛りだくさんなイベントをこなした。あ、あと垂人種のサキュバスとも縁が出来た。

探索系配信者として順調なスタートを切った俺。

そんな俺の下にある日、一通のメールが届く。

それは、日本のダンジョン探索者、その実力ナンバーワンを決める大会——KING OF DUNGEON EXPLORER——通称KODへの招待状だった。

現在、圧倒的実力を誇りながらも、探索者としての活動を蔑ろにしている芸能界の天才少女——ヒバナが絶対王者として君臨する大会。

「日本のダンジョン探索界を盛り上げる」という葉風さんとの約束もあるので、俺は大会へ参戦する事を決めた。

新橋ダンジョンで行われた第一次予選『ゴーレム狩り』。

途中、他ダンジョンから強大なモンスター、ナーガが乱入するなどのトラブルもあったが、無事終了。

全参加者中最高得点を記録した俺は、KOD第二次予選へ進出したのだった。

……そして、この時の俺はまだ知らなかった。

この第一次予選の中継を見ていたKOD絶対王者が、俺に興味を抱いた事を。

KOD第二次予選編

第一話 新しい家、新しい家族

——新橋ダンジョンで行われた第一次予選より、数日が経過した。

その後、KOD第一次予選は大きな問題はなく、全日程が終了。

公式の発表によると、全国八都市、七十二会場で実施された第一次予選の参加者は合計、約一万四千四百人。

内、突破できたのは七百二十人。

ここに、シード権を持つ六百四十人を加えた合計千三百六十人が、第二次予選挑戦者となる。

第二次予選は東京、大阪の二都市、八会場で実施予定。

A～Hブロックに振り分けられるため、俺は現在、公式から案内が来るのを待っている最中である。

さて——。

そんな現状ではあるが、少しずつ俺の実生活にも変化が起きている。

まず一つ目、対ダンジョン・魔獣特務機関……通称タイマとの間で、正式にExランクプロ探索

者として契約した。

ちなみに、政府直属の機関に所属する探索者の事を、プロ探索者と呼ぶ。

葉風さんを始め、俺を高く評価してくれる派閥の方々が頑張ってくれた証拠だろう。

まあ、葉風さんは「こんにちは、影狼の実力からしたら当然の事やん？」と言っていたが。

基本的な生活は今までと変わらない。

ダンジョン探索系配信者として自由な生活を送ればいい。

しかし、政府公認機関とのパイプがあるので、素人にはない諸権利も行使が認められている。

例えば、国が侵入を禁止しているダンジョン——『牛首トンネルダンジョン』や『青木ヶ原樹海ダンジョン』……通称『禁足地』への立ち入りもできたり（今のところ行く予定はないが）。

他にも色々できるみたいだが、現状、急いで行使したい何かがあるわけではないので詳しくは調べていない。

で、それに伴い二つ目。

フェンリルの引き取りに関する許可が下りた。

特殊な生体を確認された変異種の幼体を保護するという名目で。

あくまでも保護と育成、観察を目的とし、責任を全うするという内容を文書にして誓約した。そして、許可が下りたら、次は一緒に暮らす場所が必要になる。

今俺が住んでいる八畳程度の安アパートでは、到底一人と三匹では暮らせない。

……と、いうわけで、三つ目の変化。

「……遂に、買ってしまった」

ここは、東京都港区。

見上げるような高層タワーの、二十六階。

二十畳はありそうなんだっ広いリビングは、壁一面がガラス張りで東京の景色を一望できる。

いわゆる、タワーマンションだ。

まさか、自分が港区のタワーマンションに住む日が来るだなんて……想像すらしなかった。

とはいえ、この物件の条件は文句なしである。

ペットとの共生可。

一階のエントランスは広く、エレベーターも物資搬入用の大型のものがあり、フェンリルと一緒に乗り降りできる。

更に屋上には自然公園風の庭園があり、運動不足やストレス解消もケアできる。

気安く外に連れ出せないのも、正にフェンリル達と暮らすにはもってこいの物件だった。

「おお！ なんやなんや、すっかりセレブやん、影狼君！」

引っ越し作業も終えて、新生活開始初日。まあ、引っ越しするほど私物はなかったが……。

そんな本日、俺の新居に客人がやって来た。

対ダンジョン・魔獣特務機関、探索部第五部隊隊長の葉風さん。

それに、副隊長の東さん。

「失礼します」と、一礼する東さん。一方、葉風さんはリビングの中をずかずかと歩き回る。

「ひゃー、ええなあ、上級国民の居城やん。これから毎日港区女子とラウンジで高い酒飲んでウハやろう？」

窓の外を見ながら、葉風さんはテンション高く盛り上がる。

後ろで、東さんがゴホンと咳払いした。

「嘘々。まあ、何はともあれや、E×ランクプロ就任おめでとう、影狼君。これで、本格的に僕等の仲間やな」

「はい、ご尽力いただきありがとうございます」

葉風さんと握手する。

東さんが「こちら、つまらないのですが」と、お土産のお菓子をくれた。律儀だ。

「ほんで、《影狼チャンネル》の方はどんな感じよ？」

「ええ、先日、収益化の申請が通りました」

「マジで!? やったやん、これからはバリバリ稼がな」

そう言って、葉風さんが俺の肩を叩く。

……まあ、実際その通りだ。

今回引越したこの物件、当たり前だが月々の支払いの額が凄まじい。

俺が会社勤め時代に貯めていた貯金は完全になくなり、今はすっからかんの状態である。

とは言え、タイマにお願いすれば多少生活の面倒を見てくれるかもしれないし、「アルテミスド

ラゴンの角」を売り捌けばしばらく食うには困らないだろう。

それに、幸いにも今の俺には稼ぐための方法がある。

影狼チャンネルは、遂に登録者が1000万人を突破した。

先日のKOD第一次予選の配信も相まって、俺の存在はどんどん世界中に広がっている。

これからは配信や動画投稿、配信での投げ銭——スーパーチャット、それに案件等で生計を立てていく事になる。

本格的に、探索系配信者としての生活の始まりだ。

……ここから身を持ち崩さぬよう、真面目にコツコツ頑張ろう。

それこそ、撫子が煽ってくるような末路になるわけにはいかない。

「ま、今はともかく、早う家族を迎えに行こうや」

「はい」

俺は葉風さん達と共にマンションを出る。

タイマの車に乗り、向かう先は秋葉原ダンジョン。

フェンリル達のところへ行く。



秋葉原ダンジョン。

第一階層は自然公園として一般開放されている。

第二階層以降続く《上層》も、全体的に牧歌的な風景が続く——そんな場所。

「あれから、密売組織の動向はどうですか？」

その秋葉原ダンジョンの中を進みながら、俺は葉風と東さんに尋ねる。

「残念ながら、いちごっこやな。他人のアイテム横取りしたり、モンスターを捕獲しようとする末端の構成員をとつ捕まえては締め上げて、その間にまた別の犯行が繰り返されて、その繰り返し」

「敵の中枢にいる者を一斉検挙できれば良いのですが、未だ足取りが掴めずにいます。もしもの際には、渡さんにもご協力をお願いする事になると思われますので、よろしくお願いします」

「あ、はい」

俺は、齒切れ悪い返事を東さんにしてしまった。

「……何か？」

「いえ、別に」

現状、この場には俺と葉風さん、東さんの三人。

俺と葉風さんは、本来のスタイルである《アサシン》と《マジシャン》の格好に《換装^{かんそう}》している。

しかし、東さんだけはタイマの制服姿のままだった。

「はーん、影狼君、アゲハちゃんが制服姿のまんまなのが気になるんや」

タイマの隊員は制服姿と本来のスタイルの格好で、換装時の服装を切り替える事ができる。

今の東さんも換装した姿なので、別に心配しているわけではないのだが……

「まあ、アゲハちゃんのスタイルは大分特殊やからな、あんま真の姿は見せたがらないねん」

「葉風隊長」

ギリギリと眼鏡を光らせる東さん。

「余計な事を言うな」という圧を感じる。

「影狼君、Exランク隊員として命令してやってや。『本来のスタイルの姿になれ』って」

「いや、別に大丈夫です」

東さんが嫌なら強制するわけにはいかない。

換装している以上、別に心配は要らないのだし。

そんな風に話しながら、やがて俺達は《中層》の入り口、第十階層へ到着する。

「確か、ここやんな」

「はい。では、呼びますね」

俺が、声を張り上げようとした——直前だった。

白銀の塊^{かたまり}が暴風と共に、俺の眼前に着地した。

「キャン！」

「キャンン！ キャンン！」

すぐさま、俺の胸に飛び込んでくる二匹のチビフェニル。

そして。

「クウ」

白銀の美しい体毛を靡かせながら、水色の目で俺を見詰める親フェンリル。

久方ぶりの再会を喜ぶように、俺の肩に鼻先を触れさせ甘えるように喉を鳴らす。

「呼ぶ前に来てもうてるやん」

「久しぶりだな、みんな」

俺は三匹の体を撫でる。

フェンリルの体毛は極上のシルクのような肌触りで、温かい体も相俟ってふわふわのクッションのようだ。

つまりは、撫で心地最高という事である。

「随分待たせたけど、お前達と一緒に暮らせる事になった。ここを出て外の世界に行く事になるんだけど、大丈夫か？」

俺の問いに、三匹はパアツと目を輝かせる。

今更だけど、言葉でコミュニケーションが取れるなんて、かなり知能の高いモンスターだよな、このフェンリル達。

「本人達の意思には問題なさそうです」

「オッケー、オッケー。まあ、まずはタイマの本部で身体検査とかがあるけど、それが済んだらすぐ一緒に暮らせる……ん？」

そこで、葉風さんが何かに気付く。

すぐ近くに生えている木。

その木の陰から、顔を覗かせてこちらを見ている者がいた。

「じー……」

「……ほな、早速戻るか」

「そうですね」

「くおらあ！ 貴様等、無視するな！」

木の陰から飛び出してきたのは、赤い目に浅黒い肌、ボンテージを思わせる服を纏い、背中から黒い翼を生やした女性。

かつては、この秋葉原ダンジョンの中層でモンスター軍団を支配していた魅了の悪魔——サキユバスだった。

「フフフ……妾を舐めていると痛い目に遭うぞ？ 妾はこの数多のモンスター犇めく地獄の第十階層で生き延びてきた。既に以前と同じだけの強さ……いや、以前以上の強さを身に付けておる」

「そうか」

「この場で貴様等全員を血祭りに上げてやつても良いが……妾は今、機嫌が良い。貴様等と共に地上で暮らし、しもべとして扱ってやつても——」

「わざわざそんな事を提案する前に、お前の【魅了】で俺達を操ればいいだろう」

「……」

俺の言葉にサキュバスは口を閉ざす。

以前と同じかそれ以上の力なんて、容易く戻るはずがない。
気配でわかる。

「くっ……見抜かれておったか！ あらかじめチビフェンリルの一匹でも人質に取っておけば良かった！」

「お前じゃ逆立ちしたってこいつ等に勝てないだろ」

「おい、影狼！ これが最後の通告じゃぞ！ 本当に良いのだな!? 妾を連れていかなくて本当に良いのだな！ サキュバスじゃぞ!? サキュバスと同棲できる大チャンス逃すのじゃぞ!?」

「そもそもお前を地上に連れ出す許可は出ていないし、連れていく気もないと言ってるだろ」

「ふがー！ もう良いわ、唐変木！」

サキュバスは翼を羽ばたかせ飛んでいく。

「その白犬どもと精々楽しく暮らしている！ いつか最強のモンスター軍団を再結成し、地上に侵攻してお前らの家をぶっ潰してやるからな！ バーカーバカ！」

「クウ……」

そこで、フェンリルが俺をジッと見詰めてくる。

目と目を合わせると、不思議と何を言いたいのか伝わってくる。

「……どうやら、あのサキュバスは先日俺達と別れた後、フェンリルの体に必死で纏わり付き「他のモンスター達から守ってくれー！」と泣き付いて、今日まで守ってもらっていたようだ。

「……フェンリルがいなくなって大丈夫なのだろうか、あいつ。

「ま、とりあえず帰ろうや」

「そうですね」

サキュバスの事はさておき。

俺達はフェンリル親子と共に、秋葉原ダンジョンを出た。

第五部隊の面々と、専用の車両を用いフェンリルをタイマ本部へ搬送。

そこで諸々の検査を終え――。

「さ、ここが新しい家だ」

「キャンキャン！」

「キャン！」

港区のタワーマンション。

俺はフェンリル達と共に、新しい我が家へ帰ったのだった。

今日から、俺達と一緒に暮らす家族だ。

……皆の紹介がてら、配信でもしてみようかな？



「お邪魔しまーす！ うきやあああ！ 広い！ 大きい！ 凄くリッチ！ わああああああ！
フェンリルちゃん達だぁー！」

「ミケうるさい、興奮し過ぎ」

フェンリル達を新居に迎えた翌日。

俺の自宅を、客人が訪れていた。

探索系配信者仲間のミケさんこと、柚嶋蜜柑子さん。

そして、同じくトーカさんこと、篠屋灯華さん。

柚嶋さんはまず部屋の大きさにビックリし、続いてフェンリル達がいる事にもビックリし、派手なりアクションをしている。

そんな相方を窘める篠屋さんはクールだ。

「ひい……影狼の自宅にお呼ばれしちゃった……ど、どうしよ、どうしよ……心臓が痛い……」

いや、全然クールじゃなかった。

ブツブツと呟きながら部屋の中をグルグル歩き回っている。

「トーカちゃん緊張し過ぎだよー、影狼さんと会うのだってもう初めてじゃないのに」

「そういう問題じゃない。ミケは緊張感なさ過ぎ」

「ほら、トーカちゃんもチビフェンリルちゃん達をもふもふさせてもらおう。そうすれば緊張が和らぐよ」

柚嶋さんはチビフェンリル達とじゃれ合い、お腹に顔を埋めている。

篠屋さんも「うん、そうする……」と合流し、その柔らかい毛並みに顔を埋めて「ふにい……」と脱力した。

「わぁ……何ていうか、陽向さん……本格的に成功者になった、って感じですね」

「いやいや、お陰で貯金は0になっちゃったよ」

俺の横に立ち、だだっ広いリビングや、都内の風景を一望できるベランダを見て、そう呟いたのはシユガア——早藤雪姫さん。

本日は新居への引っ越し祝いに、三人の探索者仲間が駆け付けてくれたのだ。

いや、三人ではなく、四人か。

「ほら、小春ちゃんと挨拶して」

「こ……こんにちは、影狼さ……あ、いえ、渡さん」

早藤さんの背中に隠れていた少女が、おずおずと前に出て挨拶をする。

学校の制服を纏った少女。

早藤さんによく似た、幼い顔立ち。

顔は真っ赤で、呂律も回っておらず、一目で緊張しているのだとわかる。

彼女は早藤小春さん。

早藤雪姫さんの妹だ。

「ちゃ、ちゃんとしてお礼を言える機会を作っていただき、ま、ことにありがとうございます……と、とてもご立派なお宅にまで招いていただきまして……」

「あはは、小春、ガチガチ過ぎだよ」

「そんなに畏^{かしこ}まらなくても大丈夫だ、小春さん」

俺が微笑^{ほほえ}みかけると、小春さんは「あうう」と恥^はずかしそうに雪姫さんの背中に回り込む。

まだ、俺との直接対面には慣れないようだ。

「ごめんなさい、陽向さん。小春ってば、家だと全然違うんですよ？ 私が陽向さんと久しぶりに会った日の事も『いいないいな、羨ましい！ お姉ちゃんばっかりずるい！ アタシも影狼さんに会いたい！』って駄々こねて」

「お姉ちゃん！」

小春さんが雪姫さんのお腹に抱き付き、顔を埋めて「うぐー！」と唸^{うな}る。

「あはは、恥^はずかしがっちゃって……でも、本当にありがとうございました。この子がこうして、何の支障もなく外出ができて、普通に生活できるのは陽向さんの——」

「雪姫さん、それはもういい」

感謝の言葉も気持ちも、もう何度も伝えられた。

気にするな、と言うにはあまりにも大き過ぎる貸しかもしれないが、同じやり取りを何度も繰り返していても仕方がない。

「わかってます、でもこればかりは……」

「きゃー！ お姉ちゃん！」

そこで、小春さんが悲鳴を上げる。

振り返った雪姫さんも、「わ！」と思わず声を漏^もらした。

そこに、巨体の狼がいたからだ。

「ああ、彼女はあの子供達の親フェンリルだ。俺と一緒に暮らしている」

「あ、そうか、三匹とも引き取ったんですね……」

雪姫さんと親フェンリルは、ジッと見詰め合う。

「彼女……と言う事は、やっぱりメスなんですわね」

「一応、タイマ本部で身体検査をした結果、性別はメスだった」

「なるほど……」

雪姫さんと親フェンリルが再度ジッと見詰め合う。

……何だ？

視線と視線の間に火花が散っているように見えるのは、気のせいかな？

「あ、そういえば影狼さん！ 引越しのお祝い配信はもうやったんですか！」

そこで、チビフェンリルの顔をわしゃわしゃしていた柚嶋さんが、俺に尋ねてきた。

「いや」

「え!? まだなんですか!？」

「そういうのって、普通するものなのか？」

「そりやしますよ！ 実生活で大きな変化が起きたら話題にする！ 配信者の鉄則です！」

そういうものなのか。

配信者界限かいがいの事は、まだ知らない事が多い。

「そうだ！」

そこで、雪姫さんが提案する。

「せっかくだし、ここでみんなで配信しちやいませんか？」



「影狼チャンネルをご覧の皆さん。こんにちは、影狼だ」

俺はノートパソコンで影狼チャンネルを開き、生配信を開始する。

カメラはパソコンのカメラ機能を使い、その前に座って丁寧に挨拶をする。

配信開始と共に、10人……20人と、視聴者が増えていく。

パソコンの画面にコメントが流れていく。

「だからぁ！ 何で毎回毎回緊急配信なの？ww」

【悲報】影狼、まともに配信する気がない

「一回でいいからちゃんと告知してから配信やって！ww」

そういえば、これで三回目の生配信だが、全て告知なしの緊急生配信となってしまった。

事前の告知は、やはりちゃんとしておいた方が良いのかな？

反省せねば。

「またしても緊急配信になってしまつて申し訳ない」

「ええで、俺は楽しい」

「俺は三百六十五日、いつでも観られるから気にしてないで」

「仕事しろ」

「定職に就け」

「親泣かせるな」

「在宅勤務だよバーカバーカ」

「おお！ 今日ダンジョンではないのか。KAGEROUの貴重なプライベートショットを見られるようだね」

海外からのコメントも来ているようだ。

「確かに、今日はダンジョンじゃないな。影狼も私服だ」

「謎に包まれた影狼の実生活……その一端が明らかに……」

「何か普段着だと普通だな、影狼」

〈オーラも引っ込んでるね〉

「今日、急遽^{きゅうそん}配信を始めたのには理由がある。視聴者の皆に伝えたい事があるからだ」

〈お、何だ何だ！〉

〈重大なお知らせか？〉

〈まさか引退!?〉

〈辞めないで！〉

〈影狼が引退とか全世界が泣くぞ〉

〈引退するわけないでしょ〉

……何だか、勝手に辞める事にされているのだが。

大して重要な発表でもないし、回りくどい言い回しはせずにパッと伝えてしまおう。

「まず、影狼チャンネルの収益化が通った。これからは、以前にも増して配信者として頑張りたいと思っています」

〈おめ！〉

〈おお！ 収益化！〉

〈本当だ、スパチャ送れる〉[¥30,000]

〈収益化おめ！〉[¥50,000]

〈収益化おめでとございます！〉[¥50,000]

〈やった！ 影狼に貢げる！〉[¥50,000]

〈おめでとー！ これで美味しいものでも食べてください！〉[¥50,000]

報告するや否や、とんでもない金額が飛び交い、画面が真っ赤になっていく。

うおお、やばい、催促したみたいになってしまったな。

「ありがとう。スーパーチャットを送ってくれるのはありがたいが、みんなも無理のない範囲で。

で、次の報告なんだが……」

と、言い掛けたところで。

「キャンッ！」

「キャンキャン！」

二匹のチビフェンリルが、俺の膝の上にぴょいんと乗ってきた。

〈え？〉

〈あ、犬？〉

〈犬飼ってた……って、フェンリルじゃねえか!?〉

〈秋葉原ダンジョンの子フェンリル達だよな！〉
うっそ！ フェンリルだ！〉

〈え！ 影狼、フェンリル飼ってたの!?〉
〈きゃああああああ！ チビフェンリルちゃんだ！ かわいい！〉
〈引き取ってたの!? 許可下りたの!? っていうか、下りるもんなの!?〉

「あー、一応、タイマの許可は得ている。基本的には、俺が責任を持って育てる形だ。ちなみに……」

俺が手招きすると、大人しくしていた親フェンリルも近くにやって来た。

そして、カメラに映り込むスペースに顔を覗かせ「クウ」と控え目に鳴いた。

「親も含めて、三匹いる」

〈マジかよww〉

〈フェンリル飼ってる探索者なんて世界中で影狼くらいだろww〉

〈日本だけじゃなくて、海外にも色んな《ティマー》や《フリーダー》がいて、様々なモンスターを飼ってるけど、流石にフェンリルはいないww〉

〈ジーザス！ フェンリルと一緒に暮らしているなんて、KAGEROUはどれだけ我々を驚かせれば気が済むんだ!?〉

〈大丈夫!? 密売組織に狙われたりしない!?〉

〈いや、影狼に手を出す犯罪者なんていないだろ〉

〈飼い主が影狼个世界最強のセキュリティ〉

〈【朗報】影狼、美人の嫁さんと二匹の子供と家庭を築く〉[¥30,000]

〈おめでとー！ これご祝儀ですー〉[¥30,000]

〈ご結婚おめでとーございますー〉[¥30,000]

〈夫婦円満ですね！ 羨ましいですー〉[¥30,000]

何やら大量のご祝儀が贈られてくるのだが。

親フェンリルもコメントの意味がわかっているのか、「クウ、クウ」と満更まんぐらでもなさそうな顔で頷いている。

「ええと、もう一つの発表だが……フェンリルを引き取るに伴い、皆で暮らせる家に引っ越しをした」

そう言って、俺はパソコンを動かし、今いる部屋の様子を見せる。

〈デッッッ〉

〈ヒロッッッ！ デカッッッ！〉

〈おいおいおい、何だ今の絶景！ お台場が見えたぞー〉

〈むちゃくちゃ高級マンションに住んでるううう!?〉

〈まあ、フェンリルと一緒に暮らすのにそこらの街中じゃ無理でしょ〉

〈めっちゃくちゃ上流階級じゃん!〉

〈くそっ! 送ったスパチャなんて端金じゃねえか! 更に倍プッシュだ!〉【¥20,000】

〈→そう言いながら何で更に課金するww〉【¥30,000】

〈っていつか、ちょっと待って? 今、カメラに映ってる女の子達……〉

「あ、みんな! こんにちはー! 影狼さんのお宅にお邪魔させてもらってます! シュガアだよー!」

「ニヤコニヤコ♪ ゴロニャン♪ こんにちはーん♪ ミケだよー! そしてー!」

「……トーカ」

〈普通にシュガアとトーミケいて笑うww〉

〈いて草〉

〈おいおいおいおい! どういう事だ!? 日本はいつから一夫多妻制が認められたんだああ!? おおん!〉

〈影狼さん、これは流石に笑えませんよ。高級マンションで十代の女の子達とフェンリルを囲ってハーレム暮らしなんて……〉

「違うよ! 私達は今日遊びに来ただけ!」

「影狼さんと一緒に暮らしてるわけじゃないですよ!」

「影狼は硬派なんだから……解釈違いのブタは殺す!」

すかさず、雪姫さんと柚嶋さんが状況説明をする。

篠屋さんは殺気を飛ばしている。

「クウ」

何故かフェンリルも首を横に振っている。

何はともあれ、そこからは皆も参加して配信を盛り上げてくれた(小春さんは流石に出すわけにはいかなかったので、離れて見ている)。

先日の秋葉原ダンジョンや、新東京ダンジョンの件など、話題には事欠かない。

同時接続視聴者数も、いつの間にか100万人近くになっており、コメント欄らんも盛況だ。

へそつえば、この前の新橋ダンジョンの件が今むちゃくちゃ話題になってるけど、シュガア達は今年のKODに出るの?〉

「はい。私は二回戦から参戦予定です」

「ミケも二回戦から出ますよ!」

「アタシも」

〈おお！ 楽しみ！〉

〈わくわく〉

〈今年こそは生え抜きの探索者組の活躍に期待したいぜ〉

〈影狼がいるし、波乱は必至でしょ〉

〈去年までは《シャイニング・エピソード》のタレントの売名企画になっちゃってたしな〉

〈別にそれでも盛り上がってたんだからよくね？ シャイニーアンチうさい〉

〈お、信者か？〉

シャイニング・エピソード——通称シャイニーは、今勢いのある大手芸能事務所だ。

「何か、コメントが荒れ出したな」

「あー……KODの話題になると、高確率でこうなっちゃうんです。探索系配信者界隈が好きな人達はシャイニーが気に入らないし、シャイニー好きな人達は探索系配信者界隈の排他的な空気が気に入らないしで」

コメント欄でバトルを始めた両陣営を見て、雪姫さんが嘆息する。

まあ、それだけ影響力のある大会という事だろう。

しかし、罵詈雑言ばりぞうごんを投げ合うコメントは見えていられない。

俺は咳払いをして言う。

「喧嘩をするな。首を切るぞ」

〈ヒエック〉

〈ヒエック〉

〈すみませんでした〉

〈おい、お前等のせいで影狼がお怒りだぞ〉

〈申し訳ございません。腹を切ってお詫わびします〉

〈魂も捧げます〉

とりあえず、喧嘩は治まった。

〈そういえば、昨日のテレビでヒバナがKODの宣伝してたぞ〉

〈SNSも久しぶりに更新してたよな。KODの件で〉

〈へえ、絶対王者自ら宣伝隊長っすか（嫌味）〉

〈でも、なんかテレビでのコメント、変な風に編集されてたっぽかったよな〉

〈ん？ どういう事？〉

〈後で別の音声付け足したみたいだな〉

「あ、SNSのコメントもさ、最初に投稿されたのが削除されて、後で新しいのが投稿され直したんだって」

「あれって公式のだから事務所が監視してるんだろ？ 不適切発言でもあったのか？」

「いや、最初の投稿だとすげえ影狼のこと話題にしてたんだって」

「そうそう、削除される寸前の投稿見たけど、『今年のKODは今までで一番わくわくするー』『影狼と早く会いたい！』って。で、その後、シャイニー所属の参加者を応援する形のやつに修正された」

「へー、まあ、事務所としては広告塔に関係のない参加者の話されても……って感じだったのかな？」

「だからって修正しなくてよくね？」

「そんな事があったのか？」

「まあ、噂話程度だよ」

「何はともあれ、やはりそれだけ話題性の高い大会だという事だ。」

「ここで活躍すれば、更に日本の探索者界隈を盛り上げられるかもしれない。」

「密かに、俺はやる気を滾らせた。」



その後、一通り盛り上がりを見せ、三回目の生配信は終了。

雪姫さん達は、宅配の夕食と一緒に食べた後帰っていった。

そして——深夜。

「さてと……そろそろ寝るかな」

自由人になったものの、生活サイクルは普通でいたい。

というわけで、寝室に向かう。

「クウ」

「キャン」

「キャン」

すると、フェンリル達も付いてきた。

昨夜もそうだったのだが、彼女達は俺と一緒に寝たいようだ。

一応ベッドはダブルだが、一人と三匹で寝ると狭いんだよね……。

でも、駄目と言うと寂しそうな顔をするし……。

「仕方がないな」

俺は、寝室のドアを開けて三匹を招き入れる。



「クウン！」

「キャン！」

「キュウン！」

三匹は喜び、ベッドの上で横になる。

「クウ」

すると、フェンリルがベッドの上で、お腹を見せるように仰向けになる。

「いいのか？」

「クウ」

「さあ、どうぞ」と目が言っているの、俺はお言葉に甘えてフェンリルの横に寝転ぶと、彼女を抱き枕のように抱き締める。

ふわふわで肌触りの良い体毛に、温かく柔らかい体。

これは、布団いらずだ。

「キャン」

「キュウン」

背中側には二匹の子じ達が回り込んでおり、全身がもふもふに包まれる。

一瞬で眠気がピークに達した。

「そうだ……お前達の、名前……」

眠りに落ちる寸前、俺は呟く。

一緒に暮らすのだから、この三匹にも名前を付けてやりたい。
昼間、雪姫さん達と色々考えたのだ。

凝ったものではなく、覚えやすくシンプルな名前が良い、と。

「三匹とも、目の色が違うだろ……」

親のフェンリルは水色の目をしている。

二匹のチビ達は、タイマの検査の結果、一匹はオスで一匹はメスだった。

そして、オスの方は橙色^{たんだいいろ}の目。

メスの方は緑色の目をしている。

「お前は、マリン」

俺は、抱き付いた親フェンリルの目を見て言う。

「お前はオレンジ」

背中に密着しているチビに。

「お前はヒスイ」

腰辺りにくっ付いたチビに。

「……なんて、どうかな？ 嫌じゃなければ」

「クウ」

「キャン」

「キャン」

「キャン」

三匹は、強く俺に体を擦り付けてきた。

気に入ってくれたようだ。

何はともあれ、俺はふわふわの暖かさに包まれ、夢の世界に意識を投じたのだった。



……その時、気付いていなかったのだが。

枕元に置いた俺のスマホに、一通のメールが届いていた。

『【重要】KOD運営より、第二次予選のご案内について』

第二話 派閥争い

「ようこそ、目下絶好調の影狼君やーん、今日はどうしたん？」

「いえ、葉風さんと呼ばれたから来たんですが」

本日、俺は対ダンジョン・魔獣特務機関——通称タイマの本部ビルに招かれていた。
本部ビル内の、とある会議室にやって来た俺を迎える、いつもの調子の葉風さん。

「隊長、ふざけ過ぎですよ」

そして、そんな葉風さんのサポート役として、「今日もお勤めご苦労様です」な東さん。

「嘘嘘、いやあ、影狼君、ごめんないきなり呼び出したりして。でも重大事態発生やねん、許してや」

「メールでも書いてましたね……何があったんですか？」

深刻な表情になった葉風さんに合わせ、俺も真剣な態度になる。

葉風さんは、隣に立つ東さんに「アゲハちゃん、あれを」と指示する。

東さんは、大きくて平たくて、黒い大きな鞆かばんを持ち上げた。

これは……ガジェットバッグ？

背広やスーツ等を運ぶための鞆……スーツ入れだ。

俺も社会人の端くれだったので知っている。

「あの、これは」

「遂に……遂に影狼君用の制服が完成したんや！ 今日それを渡すために来てもらったつちゅうわけやねん！」

「……はあ」

俺は生返事を返す。

急を要する状況なのかと思ったのに……拍子抜けもいいところである。

「いやいや！ もっと感動しようや!?」

「葉風隊長、渡さんのこの反応は当然です」

「なんでやねん!? タイマ初のExランクプロ誕生！ それに伴い、僕等の派閥のみなで集まって夜通し会議して決定した制服やで!？」

なんてどうでもいい事に時間を掛けているんだ、プロ探索者。

暇なのだろうか。

「ま、何はともあれ、これで君は疑いようもなくプロの仲間や。是非着替えて見せてえや」

「はあ……」

期待の眼差しまなざしを向けられ、そう言われたなら……まあ、応えるしかない。

俺は会議室の隅に用意されていたパーテーションの裏で制服に着替える。

「おお！ ええやんええやん！ めっちゃかつこいいやん！ そう思うやろ、アゲハちゃんも！」

「はい。凛々りりしいお姿だと思います」

着替え終わった俺は、二人の前に出る。

全体的には、二人の着ている黒のスーツと変わらない。

が、腕回りの一部が加工されており、そこに『Ex』を崩したデザインが施されている。

「で、これも組織からの支給品や」

そこで葉風さんは、俺にタイマのアイコンが象かたどられたピンバッジを渡してきた。

「これは……」

「まあ、アイテムの一つと考えてもらってええ。それを身に付けてると、通常のスタイルと、タイマの制服で換装した姿を変更できるんや」

なるほど。

タイマの隊員が二種類の姿を変更できるのは、このアイテムの力があつたからなのか。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。いやあ、しかし、一つだけ残念な事があるとするとしたら、僕のアイデアが採用されへんかった事やな」

葉風さんは無念そうに天を仰ぐ。

「僕は背中にデカデカと『Ex』！ もしくは『影狼』！ って描くデザイン案を出したんやけど、惜しくも却下されてもうたんや。まあ、これもシンプルながらコンパクトに収まって、中々渋いからええけど」

……葉風さんには悪いが、この案が採用されて本当に良かったと思う。



「ほんで、影狼君、アレの件はどうなったんや？」

ひとまず、制服のお披露目は済んだので、俺は私服に戻る。

東さんの用意してくれたコーヒーを飲みながら、近況報告を交わす事になった。

「アレ？」

「KODや、KOD。しらばつくれてもあかんで？ 今んとこ、今年のKODといったら影狼参戦

の話題で持ちきりやん」

ニヤニヤしながら葉風さんが言う。

確かに、KOD第一次予選の全日程が終了した後、ネットニュースでは俺の事をタイトルに上げている記事が散見された。

どうやら、俺が第一次予選の『ゴーレム狩り』で獲得した点数は、ぶっちぎりで全参加者中トップだったようだ。

最強ゴーレムを倒す事ができたのも、俺だけだったらしい。

「ダンジョン関連の話題を取り扱ってる編集社は影狼君を推してて、芸能系の記事を取り扱つとる編集社は負けじとヒバナを推しとる。中には、早くも『影狼とヒバナ、どちらが上か』なんて煽つところもある。ええやんええやん、この対立構造。界限が盛り上がつとる証拠や」

スマホに表示されたネットニュースの見出しを眺めながら、葉風さんは嬉しそうだ。

日本のダンジョン文化の深化。

探索者のレベルアップ。

この二つがタイマ内における、葉風さんが所属する一派の目標である。

「ほいで、影狼君、二次予選は？ 確か、二次は東京・大阪の二都市、合計八会場での開催やろ？ 東京四会場の内の、どの日程に振り分けられたん？」

「はい、先日通知が来たんですが……俺はBブロックでした」

KOD運営から送られてきたメールを見返し、俺は言う。

「シュガアやトミーケも参加するんやろ？ あの娘らは？」

「三人とも別ブロックでした。会うとしたら、次の準決勝になります」

「ほーん、しかしBブロックか……って事は、アゲハちゃんとも別ブロックやな」

「え？」

俺は、東さんを見る。

東さんは「ゴホン」と咳払いする。

「ああ、そういえば言ってなかったか。実は、アゲハちゃんも今年のKODにエントリーしてるんや」

「そうだったんですか？」

「ええ、一応」

確かに、KODはプロ探索者の参加も自由だ。

先日葉風さんも、タイマから何人か参加予定だと言っていた。

「アゲハちゃんは個人のチャンネルを持つとらんだけど、前大会にも出場して決勝ラウンドまで進んだったんや。せやから、二次予選から参加できるシード権をもらってっつてん」

個人チャンネルの登録者数が100万人を超えている探索者には、シード権が与えられている。

「なるほど」

「渡さんとは別ブロックですが、もし行く行く競う事になりましたらよろしくお願いいたします」
そう言っ、東さんは頭を下げた。

俺も「こちらこそ」と頭を下げる。

東さんの戦う姿を見られるかもしれないのか……何気に楽しみだ。

さて——それから少し雑談を交えた後、用件を終えた俺は帰路につく。

会議室を出て、葉風さんと東さんと共に本部の玄関口へ向かう。

その途中で、だった。

「そや、この前のフェンリルを紹介した時の配信、めっちゃ評判ええんやで。切り抜きもしたまま
出回っとるし、ダンジョンに潜らん日は愛犬紹介動画を——」

「……？」

廊下の向こうからやって来る二人組が見えた。

その人物達を目撃した瞬間、葉風さんは口を閉ざす。

徐々に距離が縮まり、俺達とその二人は廊下の中央でかち合い、立ち止まる事になった。

一方は、巨漢だ。

百九十センチメートル近い長身に、かっさく 恰幅の良い体格。

スキンヘッドで、眼鏡の奥のさんぱくかん 三白眼で俺を見下ろしている。

もう一人も、負けず劣らずのガタイをしている。

ドレッドヘアにいか 険しい顔……。

ん？ この顔、どこかで見たような……。

そこで葉風さんが口を開く。

「これはこれは、伊東隊長。お会いしたいと思っておりました」
「心にもない事をほざくな、葉風」

スキンヘッドの巨漢が、表情を変えぬまま言う。

そして、視線を俺へと戻す。

「彼は……噂の影狼か？」

「ええ、この度、E x ランク就任が正式に決定しましたんでね、仲間の証である制服とバッジを渡すために来てもらったんです」

「上層部も、こういう時に限って判断が早い。いつものようにもつと慎重に協議を重ねるものと思っていたが……誰かさん達が力尽くで意見を押し通した結果か？」

「いやいや、組織内の大半が賛成してくれましたし、遅かれ早かれでしょう」

あははと軽快に笑い、葉風さんは俺の肩に手を置く。

「改めて紹介します。彼は、影狼こと渡陽向君。ほんで、こちらのナイスガイは探索部、第六部隊隊長の伊東焰さん」

「よろしく」

差し出された伊東さんの手に、俺も右手を伸ばす。

「初めまして、渡です」

グッと、力強く握手をした。

「渡君……影狼君は、今年のKODに参加していたんだったか」

伊東さんが出し抜けにそう言った。

「ええ、まあ」

「第二次予選はどのブロックに振り分けられたんだ？」

「Bブロックです」

「それはちょうどいい。実は、コイツも今年のKODに参加している。二次予選にも進出していて、君と同じBブロックだ。玄間、お前も挨拶しろ」

「……」

伊東さんの後ろに立っていた、ドレッドヘアの男が前に出る。

俺よりも頭一つ身長が高い。

「第六部隊副隊長の玄間です。よろしく」

ドレッドヘアの男——玄間さんが、丁寧な口調で握手を求める。

俺も、「渡陽向……影狼です」と握手に応えた。

「最近の目覚ましい活躍の数々、拝見しております。当日は、胸を借りるつもりで挑戦させていたきます」

「いえ、俺の方こそ、プロの戦う姿を近くで見学させていただきたいと思っています」

厳つい見た目に反し、礼儀正しい言葉使いだった。

俺も社会人モードで応対する。

「……あの」

そこで、俺は一つ疑問に思った事を口にする。

「俺と玄間さん……どこかでお会いした事がありますか？」

「……」

「玄間さんのお顔に見覚えがあると言いますか……もしも以前に面識がありましたら、大変失礼だとは思いますが」

「……俺とあなたは初対面ですよ。ですが、そう思うのも無理はありません」

そこで、玄間さんは言う。

「先日、あなたが秋葉原ダンジョンで捕縛した密売組織の末端構成員……《磁力拳士》の男は、俺の弟です」

「……」

そうか。

あの、元プロ探索者だったという男……。

だから、見覚えがあると思ったのか。

「それは、何と言いますか……」

「気にしないでください。むしろ、影狼さんには感謝していますよ。あのクズに制裁を加えてくれた事に。お陰で、これ以上身内の恥を世間に垂れ流さずに済む。まあ、そもそも縁は切っていました」

「……」

「【峰打ち】なんかじゃなく、そのまま斬り殺してくれても良かった」

玄間さんは、俺の手を離す。

「では、大会ではよろしくお願いします」

「……ええ」

葉風さんも挨拶をする。

「伊東隊長、ほなまた」

「ああ」

俺達は擦れ違い、それぞれの方向に歩き出す。

「影狼君、あの玄間には注意しいや」

しばらく黙って歩いた後、葉風さんがそう言った。

「第六部隊隊長、伊東焔。その部下で副隊長の玄間も、僕と対立しとる派閥の構成員や」

「……対立」

「前にも言った通り、僕の所属する一派は、この国のダンジョンに関わる文化の底上げを望んどる。が、連中の目的は逆……停滞や」

葉風さんは冷たい声で言う。

「それは、どうして？」

「簡単に言うと、外国の手先だからや。この国が諸外国に比べて弱体化する事が目的、つちゅうこっちゃな」

「……色々あるんですね」

「ほんまにな。さっきはなんや友好的な態度示してきたけど、君のEランク就任に大反対しとったのはアイツらや。僕等が持ち上げとる君に、どさくさに紛れて何をしてくるかわからん。だから、注意が必要や」

「わかりました」

俺は言う。

「もし何か気に入らない手段を用いてきたら、遠慮なくタコ殴りにします。葉風さんのお望み通り」

「……ほんま、君は頼りになるわ」

……そして、翌日。

第三回KODグランプリ——第二次予選。
予選開始。



「……ここだな」

東京都新宿区。

新宿駅、東口を出て数分。

東京を……いや、この国を代表する歓楽街の一つ、歌舞伎町^{かぶきちょう}。

そこに、そのダンジョンは存在する。

『歌舞伎町ダンジョン』と呼ばれる場所だ。

日本に点在するダンジョンの中でも、かなりの広大さを誇るダンジョンの一つである。

本日——俺は、そこを訪れていた。

理由は単純明快。

KOD第二次予選、Bブロック——その開催地が、ここだからだ。

俺は早速手続きを済ませると、参加者の証であるナンバープレートを受け取り、ダンジョンの中に入る。

第一階層に下りると、既に多くの人間で賑わっていた。

第二次予選は、東京・大阪の二都市、八会場で実施。

第一次予選を突破した七百二十人に、シード権を持つ六百四十人が加わった、合計千三百六十人が参加。

A～Hの八ブロックに振り分けられ、一ブロック当たりの参加者は百七十人となる。

『日本最強の探索者の称号は誰の手に！ 第三回KODグランプリ！ 熱き闘志を抱く者達の挑戦が始まる！』

フロア内には、電子パネルやスピーカーを搭載したドローンが跳び回っており、派手に大会のC

立ち読みサンプル
はここまで

Mを流している。

以前参加した第一次予選以上の規模だ。

既に換装した探索者達が、開始を今か今かと待っている。

自身のカメラを通して配信を行っている者達もいる。

「……ん？」

ふと見ると、KOD参加者が集まった場所は鉄柵で囲まれており、柵の外にも多くの人間がいる。彼等彼女等は大会参加者ではなく、この第二次予選を観覧に来たオーディエンスのようだ。

比較的若者が多いような気がするの、ここ、歌舞伎町という土地柄もあるのだろうか……。

まあ、何はともあれ——俺も換装を行う。

「え？ あ、わ！ 影狼!?」

「うおっ！ 影狼じゃん!」

「マジかよ、影狼と同じブロックかよ、詰んだ」

「オワタ」

換装した俺の姿を見て、周囲の参加者達が一気に騒ぎ出す。

恥ずかしい……と思うが、これも、俺に需要があるからだ。

喜ぶべき反応だと思っておこう。

「きゃ———— 影狼————」

そして、そんな声は鉄柵の外——オーディエンスの中からも聞こえてきた。

「影狼だ！ 本当にBブロックだったんだ!」

「ネットの情報当てにして来て良かった!」

「リアル影狼！ マジでマジで！ 歌舞伎町ダンジョンにいる!」

「影狼チャンネルいつも見えます!」

「影狼さん！ 大ファンです！ 頑張ってください!」

「影狼おおおおおお！ 優勝しろおおお!」

ある者は歓声を上げ、ある者は手を振り、ある者は携帯電話で誰かと話しながら、ある者はカメラを向けて。

激励^{げきれい}の声、応援の声、様々な声が飛んでくる。

ありがたいが……こういう場合、どう反応するのが正解なのだろう？

一応、影狼は硬派で寡黙^{かもく}な感じのキャラで通ってるんだよね？

だったら、軽く手を振り返すとかお辞儀するとかは、ちょっと設定に合わないのかもしれないし……。

とりあえず、俺は黙々と影狼チャンネルの配信準備を開始する。

ちなみに、今回はちゃんと事前に配信の告知をしているので、そこは突っ込まれないはずだ。

〈お！ 始まった!〉

〈こんにちは〉